
症例報告

尿管結石に合併した fibroepithelial polyp の 1 例

多根総合病院泌尿器科

細川幸成, 藤本清秀, 堀川直樹, 林美樹

奈良県立医科大学泌尿器科学教室

平尾佳彦

A CASE REPORT OF FIBROEPITHELIAL POLYP CONCOMITANT WITH URETERAL STONE

YUKINARI HOSOKAWA, KIYOHIDE FUJIMOTO, NAOKI HORIKAWA and YOSHIKI HAYASHI

Department of Urology, Tane General Hospital

YOSHIHIKO HIRAO

Department of Urology, Nara Medical University

Received May 17, 2000

Abstract: A 65-year-old woman visited our hospital with chief complaints of left flank pain and low-grade fever. She was diagnosed as having left ureter stone by KUB X-ray and left hydronephrosis by abdominal CT. After a percutaneous nephrostomy catheter was indwelled, she underwent extracorporeal shock wave lithotripsy (ESWL) twice. As these ESWLs were not effective, she underwent transurethral ureterolithotripsy (TUL) later. The ureteral polyp concomitant with ureteral stone was found and biopsied for rule-out of malignant tumor. The histological diagnosis was fibroepithelial polyp. Ureterolithotomy with partial ureterectomy including the polyp was performed because of the local stenosis caused by severe granulation adjacent to the stone. The pathogenesis and management of this rare condition are discussed.

(奈医誌. J. Nara Med. Ass. 51, 224~226, 2000)

Key words: fibroepithelial polyp, ureteral stone, partial ureterectomy

はじめに

尿管に発生する良性腫瘍は比較的稀であるが、その中で尿管ポリープは最も好発し、本邦においても多数の報告例がある。

今回、われわれは左尿管結石に対し extracorporeal shock wave lithotripsy (ESWL) を 2 度施行したが、排石困難なため transurethral lithotripsy (TUL) を施行し、

偶然認めた fibroepithelial polyp の 1 例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患 者：65 歳，女性。

主 訴：左側腹部痛，発熱。

既往歴：30 年前に尿路結石（自然排石）。

家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：1998年7月より左側腹部痛が出現。発熱も出現したため同月26日当院外科を受診した。尿路結石の既往のため腹部CTを施行され、左水腎症を認めたため当科へ紹介された。

入院時現症：身長156cm，体重64kg。体温37.8度，腹部腫瘍触知せず。左側腹部の自発痛および左背部に叩打痛を著明に認めた。

入院時検査所見：白血球18,100/mm³，CRP12.3mg/dlと高値を示した。検尿で尿中蛋白2+，尿潜血3+，尿沈査では赤血球，白血球ともに100/hpf以上であった。

画像診断：KUBで第3腰椎左方に20×18mmの結石陰影を認め，腹部CTで左水腎症およびその下方に尿管結石を認めた。

入院経過：以上より左尿管結石による左水腎症と腎盂腎炎の合併と診断し，入院の上，Double-Jカテーテル(尿管留置カテーテル)の留置を試みたが結石下端部で通過困難なため，PNSカテーテルを留置した。7月28日と8月4日の2回ESWLを施行したが，一部碎石効果を認めたものの排石不良のため，8月14日に経尿道的尿管碎石術TULを施行した。

尿管鏡所見はFig. 1のごとく結石下部に表面平滑な乳頭状の腫瘤を認めたが，ポリープ茎の根部が結石のた

め確認できず，また結石周囲の尿管粘膜の著明な炎症変化のため悪性腫瘍の可能性も否定できず生検のみ施行した。病理診断がfibroepithelial polypであったため8月24日左尿管部分切除術および尿管結石摘除術を施行した。ポリープは長さ3cmで表面平滑，光沢があり，摘出した結石の直径は約2cmでKUBの陰影と一致した。病理組織診断をFig. 2-1, Fig. 2-2に示すが，腫瘍性増生を示す悪性所見は認めず，炎症性肉芽腫の形成が認められた。

術前の排泄性尿路造影では左腎は描出されなかったが，術後5カ月後のDIUでは左尿管下部まで描出されており経過良好である。

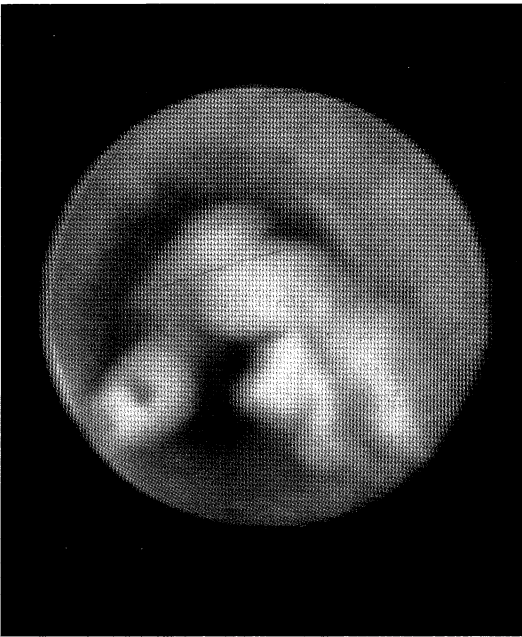


Fig. 1. Endoscopic appearance of fibroepithelial polyp inferior to ureteral stone.

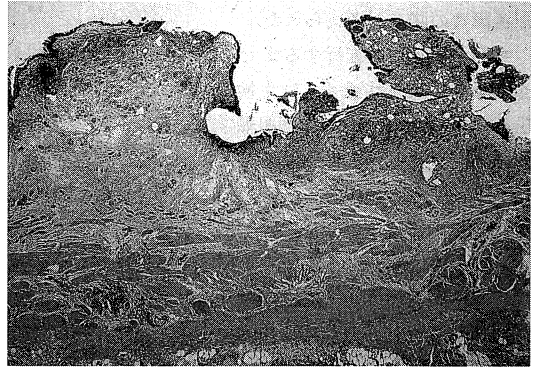


Fig. 2-1. Surface of the polyp is covered with a couple of transitional cell layers without malignancy (HE, ×100).

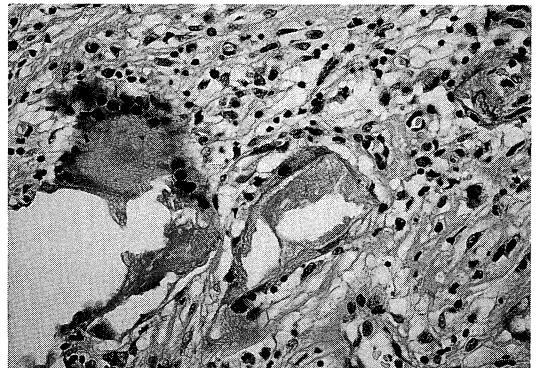


Fig. 2-2. Foreign body giant cell (HE, ×400).

考 察

尿管ポリープは、比較的稀とされてきたが本邦ではすでに多数の報告がある¹⁻³⁾。その成因については迷芽説、慢性炎症、機械的刺激、尿流障害、ホルモン失調、先天的要素などが考えられているが明らかではない。大沢ら¹⁾は121例の尿管ポリープを検討した際、ポリープの長さや結石合併、組織像について5cm未満の小ポリープには炎症性ポリープが有意差をもって多く、結石を合併した49例中45例は5cm未満の症例であったと報告している。ただし、炎症所見の有無と結石の合併との関係を調べた場合、結石の合併しているものが有意に炎症像はみとめなかったと報告している。本症例の場合、病理学的に炎症性肉芽腫、およびFig. 2-2に示す異物性巨細胞を認めること、尿路結石の既往があること、ポリープは3cm程度であったことより慢性炎症、機械的刺激、尿流障害の関与が考えられた。

今回、尿管鏡を施行するまで尿管ポリープの診断には至らなかった。大倉ら²⁾は生検あるいは手術によりfibroepithelial polypと病理組織学的に診断がえられた8病変に対し静脈性尿路造影(IVU)を8病巣に、逆行性腎盂造影(RP)を7病巣に、CTを6病巣に、MRIを7病巣に、MR urography(MRU)を6病巣に施行しており、病巣の検出率はIVU:5/8, RP:7/7, CT:2/6, MRI:2/6, MRU:5/6でCT, MRIよりMR urographyが優れており、病巣の形態の描出率はIVU:3/8, RP:5/7, CT:0/6, MRI:1/6, MRU:3/6でありRPとMRUが優れていたとしており、尿管fibroepithelial polypでは小病巣が多く、CTやMRIでは病巣の形態を捉えられないばかりか検出さえるも困難であり、MRUは腎機能低下例でも病巣の検出が可能で、病巣の壁内進展の評価にも有用であるとしている。今回、留置したPNSより造影を行ったが、病巣は結石のため描出されなかった。

治療法については腎尿管全摘術、尿管部分切除術、ポリープ切除術等に加え、より非侵襲的な尿管鏡を用いた切除術が第一選択へととなりつつある^{5,6)}。悪性所見の合併の報告も散見される⁷⁾がその頻度は極めて少なくlow gradeである。本症例の場合、尿管鏡施行時にポリープ茎

の根部が結石により明らかではなかったため尿管鏡的切除は施行しなかったが、今後本疾患に対するgold standardな治療法になりうると思われる。

ま と め

尿管結石の治療中、偶然発見された尿管fibroepithelial polypが保存的な結石治療を困難にした症例を経験した。今般、尿路結石に対する治療はESWLやendourologyによる非観血的・低侵襲治療が主体となっているが、本症例のように保存的治療に抵抗する尿路結石には尿管の器質的な他の病変の合併が存在することを念頭に置いて注意深い病態の観察が必要である。

本稿の要旨は第166回日本泌尿器科学会関西西地方会(1999年2月、大阪市)において発表した。

文 献

- 1) 大沢哲雄, 青島茂雄, 武田正雄: 尿管ポリープの2例—本邦121例の統計的観察—. 西日泌. 41: 147-151, 1979.
- 2) 高村真一, 鈴木靖夫, 坂田孝雄, 三宅弘治: 長大な尿管ポリープの2例と本邦46例の検討. 泌尿紀要. 35: 323-358, 1989.
- 3) 禰宜田正志, 松田久雄, 片岡喜代徳, 上島成也, 今西正昭, 片山孔一, 植村匡志, 栗田 孝: 尿管ポリープの3例. 泌尿紀要. 40: 61-64, 1994.
- 4) 大倉 享, 西村幸洋, 今井幸子, 廣橋伸治, 尾野 亘, 大石 元, 内田日出夫, 平尾佳彦: 尿管fibroepithelial polypの診断に対するurographyの有用性. 日本医放会誌. 58: 268-269, 1998.
- 5) 岡本雅之, 稲葉洋子, 原田益善: 内視鏡的に治療した多発性尿管ポリープの1例. 泌尿紀要 39: 739-741, 1993.
- 6) 大山 力, 今井克忠, 庵谷尚正, 吉川和行, 長沼 廣: 内視鏡的に摘出した尿管ポリープの1例. 泌尿器外科. 8: 33-36, 1995.
- 7) Davides K. C. and King L. M.: Fibrous polyps of the ureter. J. Urol. 115: 651-653, 1976.